

〈書評〉

学校教育と地域の諸活動の有機的な関係を描く

小林千枝子著

『戦後日本の地域と教育—京都府奥丹後における教育実践の社会史—』

学術出版会、2014年

小野 英喜

(京都女子大学非常勤講師)

1 はじめに

本書は、副題「京都府奥丹後における教育実践の社会史」とあるように、著者（小林）が京都北部の奥丹後地域（現在は京丹後市）に1999年から12年間訪れ、関係者と直接会い取材し資料を集め、学校教育と地域の諸活動の有機的な関係をまとめた428頁に及ぶ研究書である。

立憲主義を否定し「戦争への一里塚」に踏み出した政策が進む中で、学校教育は、大きな岐路に立たされている。それは、教育内容の上からの統制の強化であり、教員の専門職としての教育活動の自由度を制限する教職員へのしめつけであり、地域から学校を奪う学校統廃合が進んでいることとして現れている。政治体制がこのような流れにあるとき、本書は、失われつつある「地域の人間形成力」や、子どもの成長・発達を「家族と学校以外の具体的な行動を規定する」地域の役割の重要性と学校教育との関係を具体的な実践活動を考察した、まさに今問われている学校教育の取り組みの課題を明らかにしている。

本書にまとめられた教育実践や地域は、高度経済成長政策と農業基本法制定（1961年）後の、全国的な農林漁業の衰退と、山間部での離農と人口流失が相次いだ時代であり、地域が衰退していく時代である。これは、現在において日本各地で進行している地域住民の高齢化と廃村、離村、農業破壊そして学校統廃合という地域の破壊と衰退と同じである。その意味で、本書が明らかにした地域と学校における教育実践の相互作用という共同によって子どもたちを育てていく取り組みは、今の時代においても実践の指針となる研究書といえる。

2 本書の特徴

本書の特徴は、第一に、私自身も京都教育研究集会等で何度も話を伺った渋谷忠男や川戸利一以外に12名の実践家が目次に出ており、これらの実践家の個別の教育実践や考え方などが詳細に記録され、同時に川上小学校や峰山中学校の集団としての教育実践についても丁寧な「まとめ」がされていることである。その点で、ここに登場する教師たちの教

育実践を直接学ぶことができる詳細な記録になっている。

第二に、本書の目次には、子どもの父母だけでなく、「峰山町民主教育の会」や「峰山町環境浄化の会」、老人学級、印刷業者、新聞記者など、地域の諸団体や人々も学校教育や子どもとの関りを持ち、地域として学校教育に共同していることが、具体的に記述されていることである。

第三には、教育実践が、「資料・池井保の間人(たいざ)小学校における教育実践」(214頁)や「子どもの幸せを求めた印刷業者・清水久良市」(150頁)に見られるように言どおり忠、著者(小林)が面会して聞いて記録した内容が、地域の言葉を混じえた本人の発表に掲載されていることである。

教育実践をまとめた書物の中には、その著者の文章の中に資料の抜粋を直接引用したり、著者の「翻訳・付加」がある説明であったりすることがみられる。そして、書かれた文章が「引用した資料の文言」と著者自身の「見解」とが混在している書物の遭遇するときがある。

しかし本書は、著者(小林)が直接聞いたものをそのままの言葉で掲載されているため、私が読んでいても、本人が目の前で語っているような錯覚を覚えるほど、その内容に説得力があり、惹き付ける。

3 到達度評価の実践書として

「すべての子どもに学力を保障する」という到達度評価が学校ぐるみの実践として行われなくなってしまった。これは、文部科学省が2001年に指導要録を「相対評価」から「目標に準拠した評価」に変え、教育実践の内容と評価方法をより厳しく規制したことが大きな要因であった。

本書では、第一部第6章と、第三部第2章と第4章で川上小学校と峰山中学校の到達度評価の実践が、どのように地域・父母と結びついて進んだかを詳細に記している。著者は、「地域、住民自治、生活指導といったものへの着眼と到達度評価が結びついたとき、どのような実践的可能性が拓かれるのか、という課題設定は可能であるし、魅力的である。…現代に引き継がれるべき実践的豊かさが潜んでいることは疑いない」と、奥丹後の各小学校と中学校で実践された地域と結びついた到達度評価の実践を取り上げる意義を述べている。そして、五箇小学校の「五段階評価」を廃止して到達度評価に取り組む8つの視点を掲載し、到達度評価の取り組みが「教師の本務」であると位置づけていた教師集団と、その取り組み後の「子どもの表情が明るくなり、意欲と自信を持つようになった」、「できない子どもの親も育友会によく出席し、どの親も良く発言するようになった」という研究会での発言を取り上げ、1970年代に奥丹後の学校で到達度評価が成果を上げていたことを明らかにしている。

また、峰山中学校では、1975年には到達度評価に取り組み始め、「わかる授業のための10ヶ条」をつくり、集団学習を推進し、生徒集団作りにも反映させていた。そして、一時その取り組みが退潮傾向になったころ、学校の「荒れ」などの生徒指導上の課題が噴出し

た。その克服のために峰山中学校は到達度評価による「目標学習」と「学習運動」を実践し、父母・育友会や地域の人々との共同によってその課題を克服した過程と教訓をまとめた本書 100 頁に及ぶ実践のまとめは、同様の課題を高校で克服した私にとって、教師たちの頑張りを自分のこととして一気に読むことができた。

4 「総合的な学習」の先進的な取り組み

峰山中学校では、1960 年末に「憲法と教育基本法に基づいた民主的な主権者の育成」をめざして、学校目標を決めた。それに従った「目標学習」は、地域の文化や生産活動、福祉などあらゆる分野にわたって中学生が地域を巻き込みながら地域を理解する活動をカリキュラムに位置づけた。また、学習の総まとめとして 3 年生に「卒業論文」を書かせるなどその質と量の素晴らしさは、本書に 3 ページを使って掲載されている「卒業論文一覧」を見るとわかる。これらの優れた取り組みは、2002 年度から文部科学省が導入した「総合的な学習の時間」の先取り以上の教育成果を凌駕している。

5 おわりに

本書は、栃木県から京都の日本海に面した奥深い奥丹後まで 12 年間通い、段ボール箱 20 箱を超える資料を整理して著わされたものであり、単に研究書として手に取ることはできない。「奥丹後通いをつけるなかで、到達度評価だけでなく、戦後の地域教育運動や高度(経済)成長期における青少年の就職事情にも及んだ」と「あとがき」に記されているように、日本の社会史の中で戦後の子どもたちがどのように成長・発達し、地域がどのように変貌したかを具体的な事実をとおして読者に訴える好著である。

今、学校現場で教育実践に取り組んでおられる多くの教職員の座右に置いてほしい書である。

丹後町からみた日本海



撮影者：小林千枝子